# マキァヴェリの思想の原点

## ——彼の常用語を通じて観た——

柴山英一

【要約】拙稿はとくにアメリカのブルックリンカレッジ Brooklyn College のマルティン・フライシャー Martin Fleisher 教授のマキァヴェリ Machiavelli 関係論著や、カナダのカルガリー大学 University of Calgary のアンソニー・パーレル Anthony Parel 教授のマキァヴェリ論を参照しつつ、マキァヴェリ特有の意味を含む彼の常套語、たとえばアニモ ànimo、アンビツィオーネ ambizióne、インジェニョ ingégno、プルーデンツァ prudénza、インガーンノ ingánno、ヴィルトゥ virtù、フォルトゥナ fortuna その他同意語や反意語あるいは玉虫色とも見える関連用語などを通じて、彼の複雑な思想の原点—とくにその政治観や歴史思想の局面を模索してみた。なおまた彼の思想に影響を及ぼした先人たちや当代の思想家と対比しつつ、彼の思想が現代に至る間にどのような曲折をたどって来たかについても、私なりに改めて再考した。

史林 六七巻二号 一九八四年三月

## はじめに

拙論はとくにマルティン・フライシャー Martin Fleisher 教授の編著[1]を参照しつつ、特有の意味を含むニコロ・マキァヴェリ Niccolo Machiavelli の常套語、たとえばアニモ ànimo, ヴィルトゥ virtù, ネッェシタ necessità などを通じて、彼の思想の原点を私なりに考察してみたい。実は従前米、英の学者たちが二つの関連した問題を研究しており、その一はマキァヴェリの政治思想の性格について、その二は彼の政治学説への貢献という視点である。もちろん彼の問題の追

求は今日も重要であり、政治哲学への関心を高め、かつ哲学と他の学問との関連の再考が要望される。彼に関する研究は今日まで多くの外国人、ことに英国の研究者たちの名前が、彼に対して暗いイメージを回想させるようである。[2] たとえばジョン・ウォールフ John Wolfe は一六世紀にすでにマキァヴェリの著作を盗作したと伝えられるが、一方同世紀にはベーコン F. Bacon などがマキァヴェリの諸著作を読んで、正しく評価しており、同世紀末のベディングフィールド Bedingfield はフィレンツェ史 Istorie Fiorentine を翻訳したし、一六四〇年にはダクレス E. Dacres が君主論 Il Principe や政略論 Discorsi を訳している。それ以前一五五四年にポール R. Pole はマキァヴェリの著作に、宗教的道徳的立場から最初のきびしい非難を浴びせた。しかもダクレスに続いて一七世紀末から一八世紀にかけて著作の全訳が出はじめ、彼への関心がとみに高まって今日に至り、そのシンボルがフィレンツェのサンタ・クローチェ Santa Croce 聖堂に、カウパ Cowper 卿の発議で建てられた例の簡潔明快な碑文であろう。一九世紀になって、マコーレー T. B. Macauley なども彼に関する論文 Critical and historical essays, 1827 を書いており、次いでモーレー J. Morley も Machiavelli, 1897 を発表、またフィリップス Philips は貴重なマキァヴェリ書簡類の写本を保存したが、その後現代に至ってはバード L. A. Burd による君主論の英訳（一八九一年）や論著 Machiavelli（一九〇四年）など、その他広くヨーロッパやわが国でも彼への関心が普通して来たが、しかもそれゆえにこそ実は誤伝も多く、従って拙論の主なねらいは彼の論著のなかの諸用語を通じて彼の思想の原点を探るささやかな試論である。本稿は便宜上一―四の項目別に記述するが、いずれも密接に関連する内容であることを、あらかじめ付言しておきたい。

政治に対する情熱がマキァヴェリの世界の核心で宿命ともいうべきものであるが、今日まで色色異った解釈があるのは事実である。たとえば政治家、学者、評論家たちは、しばしば彼を激論の主題にした。しかも実は生誕五百年記念の一九六九年には傾聴に価するマキァヴェリ観が発表されている。[3] ということは彼が一六世紀以来、今日も政治思想家たちの間に生き続けているわけである。実はアリストテレスやホッブス、スピノザ、モンテスキューなどと比較しても、マキァヴ

ェリは彼らに劣らず、たえず史上に復活して現代に強く生きている。彼にとって国家の偉大さの決定的基準とは、彼が熱愛したローマ共和国のように不滅の生命力であった。彼の思想を理解しようとするどんな試みも、結局は彼のヴァイタリティ（いわゆるヴィルトゥ virtù）に対する適切な評価如何に帰するといってよい。このヴィルトゥという個人の能力と政治あるいは歴史的立場との関係に対する彼の関心は、西洋思想の主流ともなり、探究のトピックになっている。彼は友人グィッチャルディーニ Guicciardini と彼自身との相違点を識別していたが、実はグィッチャルディーニとっては環境の重圧に直面した場合、人間の知性と活力の両立調和は不可能であるとし、彼は結局人間は時間と出来事によって圧倒された、運命の人質であるとしたが、マキァヴェリはこのような運命論には無関心で、人間の行動が効果的であり得ることには疑問を懐かず、また人間のヴィルトゥ（力、後述する）の役割をより明確にするために、異った多くの行動方式間の関連についての研究に熱中した。

ここで彼のヴィルトゥの性質と変化してやまない時の流れとの関係を要約しておきたい。元来ヴィルトゥの概念は、たとえば一七世紀にはイギリスの政治哲学者ハリントン J. Harrington や共和主義の作家でマキァヴェリに関する若干の著書もあるネヴィル Neville を始め、同じく共和論者で愛国者のシドニー Sidney, さらにオランダのスピノザのような思想家にも影響を及ぼした。これらの人人は政治生活の原動力に関するマキァガェリの洞察力を称賛し、また彼の政治的行動主義を高く評価した。というのは彼の思想が、その大胆な政治的実践的知能なりエネルギッシュな指導力を通じて、運命（フォルトゥナ fortuna, 後述）を制御し得るとした。次に一八世紀のフランスではモンテスキューやルソーのような君主制反対の支持者たちも、マキァヴェリの思想の有用性に注目した。その後一九世紀のイタリアでは近代国民文化の父祖たち、たとえば・サンクティス De Sanctis のようなリソルヂメントの人人は、彼を政治的統一と民族的偉大さに対する情熱の権化と見なした。二〇世紀のイタリアも同様で、たとえばグラムシ A. Gramsci はマキァヴェリ流のヴィルトゥの政治的能力と後述のプルーデンツァ prudenza（抜け目なさ、慎重さ）によって、イタリア人の生活を変革しようと

したマキァヴェリの使命を具体化するのが、革命政党であると解説する。グラムシはレーニズムをマキァヴェリの思想と重ね合わせて考察するが、ここで私はマキァヴェリの思想の原点に立ちもどって、彼が人人に与える活力とはどのようなものか、現代における彼の役割如何という課題の検討を試みる必要がある。

右の政論家たちはそれぞれの立場で必然的にマキァヴェリに注目したが、彼は当代都市国家の命運を考えつつ、彼自身の祖国フィレンツェ Firenze のために活躍した。さらに彼はその後の国民国家の展開や西欧人の政治生活発展期に生きた人人にとって関係の深い課題を探究したわけで、少なくとも彼は人類文化最高の表現としての政治生活の考察検証に執念を燃やしたことは確かである。そもそも彼の思想の長期に及ぶ生命力の原因は、たとえばプラトンやアリストテレス、キケロその他彼に大影響を与えた人人は論外として、ともかくも彼自身が政治生活を高いレベルに引き上げた事実によるものである。彼の考える世界は政治が根本で、人生とは結局政治的社会であり、彼の人生に対する情熱と政治への熱情とは同一で、彼の人生に対する劇的表現と同様に、たとえば彼特有の思考であるヴィルトゥこそ今日彼が依然命脈を持続するゆえんでもある。彼のドラマチックな表現のなかには常套語フォルトゥナがあり、この語はまさにヴィルトゥの相対的概念であって、彼の諸著作には両概念の出会いの場面がしばしば展開する。[4] 従って彼の心理構造と政治の本質との関係を探究することが重要であるが、当面彼の心理を解く鍵とは要約すれば以下に例証するように、彼独自の用語間の相互関係に注目することである。

① フライシャー教授はニューヨークのブルックリン・カレッジ Brooklyn College の政治学教授で、拙論は彼のマキァヴェリ関係の編者 Machiavelli and the Nature of Political Thought, 1972 のなかで、とくに論説 A passion for politics: The vital core of the world of Machiavelli や、カルガリー大学 University of Calgary の政治学教授アンソニー・パーレル Anthony Parel の論文——前記フライシャーのマキァヴェリ論を論評したもの——などを取り上げて論述してみたい。実は右編著の序文に、かつてマキァヴェリ生誕後五百年記念に当る一九六九年にトロント Toronto のヨーク大学 York University で、彼の政治思想を巡る研究集会の時の諸論説が紹介されている。たとえば同大学の政治学教授ネール・ウッド Neal Wood も、マキァヴェリの戦術論 Arte della Guerra など広範にわたって、見解を述

べている。拙論ではとくにバーレルの論評を引用しつつ、私見を記してみたい。彼はマキァヴェリの世界を提示する仕事は確かに困難であると指摘するが、しかも私たちはフライシャー教授がそのような難事に着手した恩恵をうけていることは間違いがない。実はフライシャーが探究する世界とは、もちろんマキァヴェリが観察した情熱的な政治的かけひきの世界であり、それはまた人間精神の内なる世界であって、まさに新たな手段の持主のみが直観的に理解し得るといえよう。

## 一　とくに用語アニモ ànimo[1] を巡って

マキァヴェリの人間観に従えば、本来人間とはもろもろの傾向を有し、たとえばもっとも基本的な傾向の若干は忘恩、野心、貪欲などで、人間の精神（アニモ）は諸傾向にはずみをつけるとする。この人間精神に関する彼特有の常套語をフライシャー教授は次のように分析する。[2] たとえばアンビッィオーネ ambizione（野心、功名心）、インジェニョ ingegno（狡猾、抜け目なさ）、プルーデンツァ（既出、抜け目なさ、慎重さ）、インガーンノ inganno（詐欺、策謀）、ヴィルトゥ（既出、勇気、精神的また肉体的活力など）というように時と場所に対応して使い分けると指摘する。また哲学者や心理学者ならぬマキァヴェリが果して一貫性をもって右の諸用語を使ったかは若干疑問であり、これらの語意を明確に解説するのは容易でないと述べている。

アニモとは人間が行動を開始する核心なり原点で、彼がしばしば用いる言葉である。しかしこの用語を単に精神と翻訳できない理由は、彼が一般的な精神とは異った意味に解して必ずしも古典的キリスト教的な意味や哲学的に解釈しないからで、換言すれば人間関係についての純理論的な思弁は彼の最大関心事ではなく、彼は精神の機能に関する純理論的な知識をむしろ軽視した。実は一六世紀のコムーネ、フィレンツェに奉仕した時、彼は国務に忙殺されたが、のち彼が不本意に隠退した時、寓居でも牧歌的な自然や高尚な文学論とか教養生活のみに安住せず、むしろ依然として本領である現実的

② J. H. Whitfield, Machiavelli, 1965, p. 1.

③ M. Fleisher, op. cit., pp. 114-5. マキァヴェリや当代人にとっては古代への賛美に価値があり、そのねらいは尊敬に価する祖先を模倣するように励ますことにあった。単なる文字でなく、精神と行動の両面で先人を讃えるというのであれば、先人たちがかつてあったと同様に、我我の人生にとっても大きな刺戟になるとした。

④ ibid., p. 117.

な政治問題を選んだ。もし彼が他の時代やイタリア以外のことを観察していたとしても、それは超政治的な哲学的あるいは宗教的なものではなく、しかもまた人類文化を全く政治とは別個のものとして無視したのではなく、むしろ綿密な政治の行動計画を練るための手順であるとした。実は当代人を刺激し必要な政治行動に着手させるために、彼自身過去の歴史に注目したのであって、彼の諸著作は彼が熱愛し、しかも好機を逸した政治の舞台復帰への大きな期待の所産でもあった。この点例の政治的には不幸であったキケロなどとはまさに一味異っている。

彼に従えばアニモはダィナミックではあるが、他面ものごとを崩壊させる性質があり、それゆえにある目的を授けてこれを鍛練し、政治行動とその成功の要素として活用する必要があるとする。[3] 実は人間の内的世界に関する彼の見解は、禁欲的なストア学派よりはむしろ人間とは本来罪深いものとするアウグスティヌスの見解により近く、理性なり意志は堕落によって弱体化するが全滅せず、跛行しつつ健全なものへと徐徐に進展し、訓練によって全壊を免れるとする。また政治とはある程度アニモの内的世界と同様に、制度や法律など外的世界の救済と絶えざる革新の技術であると論ずる。[4]

実は彼の同国人たち、たとえばフィレンツェのサルターティ C. Salutati やブルーニ L. Bruni のような人文主義者の間でも、政治生活はアニモに対して十分よい環境を与えていなかったが、マキァヴェリにとって政治とはまさにアニモそのものの発揮であり、彼が時として専制政治に注目せざるを得なくなったのは、政治からの逃避を拒否する強烈な執念であり、人間世界に関する洞察であった。それゆえ彼のアニモは諸著作のなかに見られるように、徹頭徹尾政治的なものであった。彼特有のアニモ観があらゆる活力の源泉で、従って古典的な精神構造とのバランスが欠落するが、ともかくも彼のアニモは発動するものの絶えざる根源で、このようなアニモの連続的な運動は不規則多様であり一定不変ではなく、このアニモのなかでいわゆる理性が主権を掌握するとか支配的とかではなく、アニモの機能なり任務遂行について彼はさらに次のように述べる。アニモとは単なる精神とか理性以外に諸能力を調整するものであるとし、あらゆる状況下で、彼独自のアニモの活動に関する反伝統的ともいうべき特徴を呈示する。たとえば君主たる者はアニモの偉大さと気高さによ

って親愛を得なければならないとか、市民精神を奮い立たすべきであるという工合に。[5] 彼はアニモによって祖国を野蛮人から取り戻すようにとメディチ家に訴えたり、また例のサヴォナローラ G. Savonarola についてはその説教、慎重さ、勇気（ヴィルトゥ）を称賛する。彼のアニモは常に野心的かつパルチザン的に加えて人人を刺激し、時に冷静にさせ、またむほん心や執ように復しゅう心をおこさせたり、不実で他面自由奔放であり、いわゆる彼流のヴィルトゥ（活力）を有する。

さて彼のアニモとヴィルトゥの関係であるが、元来彼がアニモという語を使用する場合には、ヴィルトゥと同様に活力、大胆さ、迫力とか、強烈なものを含む表現でさえある。たとえばある人間は柔弱ではなく勇猛果敢の形容詞であり、積極的で有能な教皇シクストゥス Sixtus 四世などはまさにそうであるとする。従ってあらゆる活力の源泉としてのアニモの全能力を期待すればするほど、彼にとってアニモの効用が明確になり、それがまた彼の古代ローマ賛美の核心ともなる。

精神は本来あらゆる行動の根源であるが、彼のアニモはいわゆる正統派の古典的な精神とは異り、不動でしかもそれ自体の原理に従って決定づけられ、アニモのなかにヴィルトゥがあり、たとえば兵士たちはこのヴィルトゥある指揮官を敬愛する。かつてカルタゴに脅威を与えたアガトクレス Agathocles[6] の残虐な行為には、さすがに彼もそのヴィルトゥを認めないが、しかしアガトクレスの活躍ぶりを説明するのに、その精神的肉体的活力に言及する。それゆえ一体マキァヴェリのアニモとかヴィルトゥとは何か簡単には解説できないが、それは単なる能力ではなく、たとえばアニモ自体が独自の力を含む微妙なもので、とくに政治的軍事的行動で完全にその力が発揮される。このような解釈で彼のアニモとは、政治的偉大さのなかでそれ自身を明確に実現させるものであることが判明するが、当面ヴィルトゥと同義語である活力としての彼のアニモ観について、なお若干の私見を述べてみたい。彼によれば、ある人間は勇気があり、しかも時として理由なく人を殺したり、ある場合には殺人以外の方法で相手に兇暴な振舞をするが、一方アニモ無き弱気な人間は人としては上等でも有能でもないとする。しかもこのようなアニモ観には次の疑問が生ずる。すなわち、もしある人があまり有能でな

いとしたら、その人物は結局敏腕家にはなれないが、彼はこの点について明確に解答していない。また彼はたとえアニモやヴィルトゥに関する彼自身の根本概念には触れないにせよ、有能とか人間的なものとは何かについて明確な基準を無視するのではなく、この点は彼一流のアニモ観を理解するのに重要である。[7] 彼によればアニモは当然活力、勇気あるいは行動力如何によって適宜調整され、これらがアニモの効用であり人間の力となる。従って、おく病な精神は断じてアニモとはいえないとし、彼が決意や勇気について語りたい時は必ずアニモという語を用いる。vile というイタリア語の形容詞が〃おく病な〃の意味だとすると、animóso は〃勇気ある〃スピリットを指し、軍隊の武勇を示す語となる。おく病風が吹くとアニモは堕落するのみならず消滅する。かくして人人はそれぞれに幸不幸のなかで人間の彼割を演ずるが、結局人生の浮沈に立ち向う勇気づけのための軍事的訓練に類するものは皆無になるとする。元来彼がたとえば平静さ、威厳などに関する問題を論ずる場合には、それらを単に理想としてよりはむしろ、たとえば果体的な軍事的価値（ヴィルトゥ）の局面からである。[8]

彼によれば訓練で得られる落着きは、厳密にはアニモすなわち人間存在の中核としての精神なり理性によって明確に保護されるとする。精神とは必ずしも調整とか自己統制の中心とはなり得ず、彼の考えでは平静さも誠実さも手の届かぬ距離にあり理解の及ばないものとする。しかもまた彼が賛美するアニモの効能とは単なる平静さではなく、一種の寛大さ偉大さであり、また彼が平静さを念ずる場合には道徳的な効力ではなく政治的軍時的効能を選び、たとえば兵士の沈着さとか武勇を意味し決して自己顕示ではない。かくして訓練とか自制が享楽、怠惰、安逸などに対する防波提となる。彼の言う無気力とはアニモの耐久力、勇敢さを奪おうとしてアニモを惰弱に変えようとするもので、逆に彼のアニモたるや地獄へ落すおく病を防ぐ強固なとりでの役を演ずるものでもある。

以上の論議のほか彼は市民軍の重要性などに着目したが、とくに傭兵に対する彼の敵意は単に不信というより以上の深い原因があるといってよい。逆に彼の市民軍への信頼は絶大で、共和論者たる彼にとって人間と市民は二にして一で、最

善の教育の基本は軍事的訓練であるとし、その理由として、それが深くアニモにかかわるものであり、アニモを公正絶妙に調整して、きわめて良好な状態に導くゆえとする。ちなみに彼にとっては、たとえばスコラ哲学者や修辞学者間の論争とか中世の大学以来の諸教科間の問題点などは、彼の同時代人によって一応不十分ながら広く論ぜられている教育問題であり、ともかくも彼は元来軍事訓練のような男性的なものは当代の男性の人生にとって、むしろ唯一の心の準備に関するものというべきであるとした。

彼に従えば、アニモの特色とか人間関係を検証するのに、とくに役立つ多くの実例があるとは必ずしも言い難いとする。たとえば勇気とか男らしさとしてのアニモは彼にとって一つの価値（ヴィルトゥ）であるが、それは行為にかかわる唯一の基準ではないとする。元来人間に対する評価は合理的な秩序体系とか、超自然的世界やキリスト教の倫理的体系の破たんなどと関係のある問題でもあるが、彼によれば結局行為の結果影響が問題を評価する役割をするのであって、すべて人間の行為は結果によって判断されるべきで、たとえばある君主の行為について論ずるとすれば、君主にはその国の運命なり状況のままに変化対応する矛軟なアニモが必要であるとする。この含蓄に富む彼のアニモは絶えずものごとを評価し、かつまたもろもろの願望を制御したり、ヴィルトゥを授ける能力でもあり、しかも彼のヴィルトゥ観は彼一流の主観的立場からであるが、ヴィルトゥを左右する力は社会的状況によるものであり、環境がヴィルトゥの現実化の客観的な契機になり、ヴィルトゥを充当する力はとくに政治的秩序の働きであり、政治力が社会的政治的秩序成否の根源であるとする。さらに最終的にはアニモが求めるものは前述の偉大さに関する認識であり、アニモにとって唯一の適応する活躍舞台は政治の局面とする。というのは政治以外のすべての偉大さの形態は、結局政治的偉大さによって決定するというのである。[9]

① マキァヴェリの場合、アニモとは主として精神力、意志、勇気など一種総合的な含蓄ある用語であり、後述の彼の常套語ヴィルトゥと関係の深い語である。なお彼はヴィルトゥを勇気、意志、武力、政治力、力量など臨機応変、彼なりに多面的な人間の力の語意に用いている。

② M. Fleisher, op. cit., pp. 118-47. なお拙著、マキァヴェリの歴史的研究序説、風間書房、昭四四年、一四六―五六頁および二〇六―三四頁。

③ ibid., pp. 151-2.
④ ibid., p. 152.
⑤ マキァヴェリの諸著作関係の主な参考文献の若干。L. J. Walker, Discourses of N. Machiavelli, 1950: G. Bull, The Prince, 1961: A. Gilbert, The letters of Machiavelli, 1961: Feltrinelli, N. Machiavelli, Opere, 1960-5.
⑥ アガトクレスはシラクサの僭主で、のちシチリアの大半を支配した。
⑦ バロン H. Baron, ギルバート F. Gilbert, リドルフィ R. Ridolfi なども、マキァヴェリにおけるウマニスタたちは、アニモとか貪欲 appetito, 野心 Ambizione その他同様な概念の個個の役割を犠牲にして、それらをむしろ誇張拡大することによって、彼を次第にモラリストに変身させるものと強調する。
⑧ G. Müller, Machiavelli Gesammelte Schriften（以降 M. G. S. の略号で示す）. Bd. I, ss. 415-9: 政略論第三巻第三一章。
⑨ 前出拙著二〇六―三四頁。

## 二　アンビツィオーネ Ambizione を中心に

前記パーレル教授は単なる評論よりはむしろ討論形式で、マキァヴェリの常套語アンビツィオーネ（野心）に対するフィシャー氏の見解を次のように論評する。氏はマキァヴェリを野心のダイナミックで貪欲な局面や史上における不安定さ、戦いの原理としての性格を不断に追求した人物とし、またマキァヴェリの野心は理性では制御できないものとしながらも、偉大さや秩序あるいは栄誉の原理でもあるとする。[①] これに対してパーレルは次のように明快に解答する。すなわちマキァヴェリはアンビツィオーネを二つの広義に併用し、その一は野心の対象が自身で、その二は祖国 Patria であるとし、第一のタイプの野心が俗世諸事の変動の原因で、祖国やよい都市を破壊すると指摘する。[②] そこでマキァヴェリの野心はパーレルに従えば強欲で明示される利己主義に外ならず、まさに家族や私的な問題を基礎とする派閥主義のなかでの利己主義であり、マキァヴェリはこのような野心がイタリアを破滅させ、事実またいずれの国をも駄目にするのが常であるとし、[③] かくして彼は野心を政治腐敗の根源として大いに懸念したが、彼の野心の用語には今一つの意味がある。それは野心の目的が祖国やよき都市のためであり、野心自体は悪であるがそれが適応する目的用途があるというのであって、とくに祖国への奉仕であるとする。もし野心にヴィルトゥ（武力）が付加されたら、国はそのような野心の力で存続し、また

もしよい法律の元に建国されるなら、たとえ国内での暴力は容認されぬとしても外に対して武力を用い、国内の苦悩はほとんど止み、しかもすでに暴力が実行された他国領は不安定のまま放置されることは確かであるというのである。[4]

さらにマキァヴェリに従えば、祖国に奉仕する手段に野心を用いると必然的に戦いを誘発し、他国を混乱させ、かくして野心がその国の実力者の元で秩序を確保する間は世界平和の期待は絶望であるとする。なぜならば戦いが不可避となるゆえで、彼にとって野心自体が非難すべきものであり、しかも国家の視点では必ずしも非難でなく、むしろ称賛すべき場合があるとするが、人類の秩序のためには使用できぬものと論ずる。従って時に野心が安定の基礎になる場合もあるとし、古代ローマの平民対貴族のように、野心の進行が国家形成の主な活力として明示されるというのである。しかも結局彼は、私的栄誉や自己の目的の手段として野心を用いるのが暴政の実体であるとし、カエサルこそまさにそうであり、邪悪な野心は祖国を害する内乱を生ずると述べ、もしマキァヴェリ自身君主であったら彼が憎み、この世から追放したのは内乱であり、内乱よりむしろ対外戦争を選んだであろうとさえ考えられる。しかもまた彼によれば国内秩序に関する限りでは野心が時に暴政に対立抗争し、よい状況下の市民生活を生み出すものであり、ヴィルトゥを欠く場合は政治的腐敗を招き、結局他国に支配されるに至るとする。

さて前記アンビツィオーネや後述のインジェニョ ingégno（狡猾さ）、インガーンノ ingano（詐欺、策謀）、プルーデンツァ prudenza（抜け目なさ）など三用語の関連については、まず彼が理性を全く無視するか否かの究明が重要である。彼によれば理性とは三用語と共に人間の能力であり、三用語は能力活用の三種の異った手段であるとする。この点に関して、フライシャーはいみじくも次のように指摘する。[5] マキァヴェリの理性 ragióne とは禁欲主義者とは異なり、道徳的義務や神聖な目的とかあるいは道徳に関する根本的な知識を基礎としたものですらなく、まさに目的よりもっぱら手段に関する能力であると論ずる。ただし、もちろん理性の役割は若干目的という概念なしには第一に前記インガーンノは成立せず、効果的な事実は生み出せないが、もし彼の理性が全く目的に関する能力ではないとしたら、彼は単なる任意主義者

になると述べ、さらに理性の役割のなかには確かに野心の活力と、その実行があり、しかも助言者としての理性と統制力の無い理性との相違という問題は、結局マキァヴェリ流の流動的な用語から生ずる難問であるとする。さらにフィッシャーに従えば、本来マキァヴェリの理性とは助言も制御もせず、また助言するとしても選択の自由があり、彼の理性観は制御せずということの弁明として、人間は事実堕落するゆえ理性が示唆するものを拒否するとする。しかし、もし理性が支配するなら人間は当然理性の示唆を受け入れるに相違ないし、また理性が単なる助言者にすぎなければ助言の受容または拒否は自由であり、もし拒否されるなら欠陥は理性ではなくむしろ意志であり、腐敗した意志はたとえそれが理性と談合しても、理性に追従しないのが常であるとするのがマキァヴェリ流の理性の実体であり、右の三用語などは結局意志が理性の助言を拒否するものとする。彼に従えば真偽の認識の判別は、たとえば右三者が道義とは無関係に理性を適用することであり、このような道義抜きの方法は結局現実的な行動能力を意味するもので、理論的な知識というものの計算外のものであるとする。[6]

パーレル教授の確信では、マキァヴェリが人間の内的世界を示すための第一の関心は、政治行動や制度の根底にあるアニモであって、それは貪欲、策謀、忘恩などによって打ちのめされるが、そのような不安定なアニモの実体を無視して彼は、祖国や民族のなかにいわば堅固な建造物を建てようとした。それは指揮者たちのヴィルトゥ（実力）が認めるものであり、マキァヴェリは実際にこの世の不安定な要素に注目しつつも、他面それ以上に人生の安定した諸要素をも究明する意欲さえ示したと論ずる。たとえばパーレルはマキァヴェリが法律、軍事、宗教さらには精神や理性の問題にさえ深い関心を示したとする。[7]

次に興味をひくのは、彼の常套語アニモと願望 voglio, 動機 motivo, 感情 emozione, などとの関係である。また公私を問わず、人間の行動を説明するのに彼がよく用いる語、たとえば願望 desidèrio, 貪欲 appetito, 前記の野心、性質 umóre, 情熱 passióne などであるが、一見これらの用語は常に一定の状態で用いられるのでない点に注目する必要があ

り、時として彼はこれらを混用する。それゆえ、もしこれらの語句の意味が固定されないとすれば、語句の入れ替えは、彼の意図する根本的な事象を示唆したものである。

個人やグループの行動を記す語として前記アンビツィオーネを用いるのは彼の好みであり、[8] この用語にしばしば出会うことから考えると、これは単に用語上の問題ではなく、彼の思想の基本に関すると考えてよい。従って彼は国の秩序や政体にとって脅威となる野心について考察し、さらに野心は人人の自由を守る欲求から他人を支配する欲望へと進行するとし、この点たとえば彼の著、政略論は人間のもろもろの野心を記しているといっても過言ではない。[9] 彼によれば野心の本質は自己の限界を定めないものであり、本来人間性は野心的であるとし、たとえば共和国の秩序とか永続にとって主な危機を説明するのに、野心のせいに帰する。野心はまた国の内外の紛争の主因であり、嫉妬 gelosia も野心と関係があり、ある国の他国に対する嫉妬は結局支配欲という野心によって起こされるとする。彼は個人の場合と同様、国家や階級の行動を記すのに野心の活用について確言し、たとえばローマ共和国の偉大さの根源を、野心を拘束する法律に在るとした。すなわちローマには貴族と平民があり、前者の特徴は野心で、後者の心（アニモ）が不安定であるのに対して、前者のそれはきわめて野心的であるとする。しかもマキァヴェリにとって、平民が野心的でないというのではなく、野心は貴族にとって、より強烈な特色であるとの意味にすぎず、また貴族の野心は人民のそれよりも共和国の自由にとって、はるかに大脅威となる傾向があり、また貴族の名誉欲は抑制すべきであるとする。

さらに彼に従えば貴族と平民のうち、いずれか一方の野心を抑えることは、たとえそれが可能でも好ましいことではない。なぜならば、名誉欲は貴族の野心のなかでは、他国との接触上では何ら影響のない、また偉大さの要素でもないからである。一方人民の欲望は国力欠除の際には、たとえば不必要な武器を与えるようなもので、両者のうち一方のみを抑えることは望ましくないとする。さらに彼は両階級の野心は対内対外的にも、時として人民を支えるのに必要であるとし、また野心は無限に拡大するゆえ、一階級の欲望 appetito だけの抑制では、今一つの階級のそれを放置することになると

する。しかも元来彼はこの二階級の中間的なものの実現を求めずに、秩序とはこの二者の衝突であり、調和よりは右か左か、一種の緊張状態であると論ずる。ちなみに彼はたとえばローマの秩序とか自由保持の原因を、人民の不安動揺と貴族の野心との衝突と考えるのである。

本来野心とは活動的であり、秩序や緊張状態は永久不変ではない。その上、たとえばある事件は一回限りではなく、政治改革や復興に際して、くり返し発生する。従って彼は立法家の役割は秩序づくりのみでは消滅せず、新法制が新事態に対応して制定されねばならないとし、たとえばローマの貴族の野心をより拘束するために、護民官の制度を認めるが、しかし権限の付与は結果的には護民官の野心を抑制するための新たな措置を構ずることになるというのである。本来野心とは各所に遍在し、きわめて強力で戦いの主因ともなり、その影響下で個人も国も支配され、時として人間の分別を奪う盲目的な影響力を有することにもなる。このような点について彼は、野心は強力絶大であるから現在の欲望を和げるために努力して、寸時も邪悪に心を奪われないようにすべきであり、結局人間を変えるものは野心と欲望に外ならないとするのである。[10]

右の諸実例は彼の野心に関する語法の具体的な意味を示したものであり、また人事についての彼の記述の真意の理解に大切な他の常套語を総合的に考える上で参考になるもので、彼にとって、野心とは理性以外の力によってのみ制御できるとし、また彼はその含蓄ある用語のなかで、本来不完全な人間の性格とか賢不賢を明確に指摘することは、禁欲主義者や逆に快楽主義者にも不可能事であると述べている。[11]

実は彼の思想のなかで、野心の重要な役割については、彼の次の論拠からもうかがわれる。すなわち人間とは不幸に悩まされがちで、他面幸運にも慣らされている。というのは人間は常に野心が原因で闘争するもので、野心が人心に及ぼす影響は大であるから、たとえ高位に立身しても決して野心を放棄しない。人間の天性はそうであるが、たとえあらゆるものが欲望の対象であっても、すべてを得られるものではないから、欲望とは結局すべてを成就する能力の限度を越えるも

ので、結果的には人間が現実に所有するものは実は不満そのものであり、そこに運命 fortuna の浮沈が生じ、より多くを得たい者や、すでに得たものを失うことを恐れる者もあり、あるいは敵意や闘争が起って一国が亡び、相手国が興隆することになる。というのは野心は欲望と関係があり、望むならばすべての欲望を満たす方法を求めることにもなる。しかもまた彼は禁欲主義者と快楽主義者とを問わず、いずれも欲望の抑制を意識して満足できるわけであるが、本来この世には衝突する客観的な原因は無く、むしろ和合が物事の本質であるとする。また欲望は結局際限なく、人間はとくに名誉を得られないのが不満と野心の両者の根源であると論じ、そのような状況の一は栄光を求めること、二は不平不満、三は欲望を背景にアニモの支配、四は貪欲を満足させる手段の獲得であり、しかも五は欲望を人間本来の力（ヴィルトゥ）によって可能な限り追放することとするのである。[12]

彼にとっては、真に永続的に満足できる対象は無かったが、さらに欲望の対象物と人間の関係は常に他人の欲望の介在とのからみ合いであり、必然的に自己の欲望の実現にとって望ましくないゆえ、実際問題として本来の理想的な社会秩序は存在しないとし、そこで第一に政治への没入なり先取りを力説する。欲望がある以上、衝突は避けられず、その意味で人間とはまさに政治的動物で、相互に自己満足の手段を認め、他を支配する方法をコントロールすることに関与し、さらに今一つの政治的理由で人間は他との関係が生ずる。すなわち人間はとくに名誉――それは結局政治的野心であるが――を欲するゆえ、かつまた名誉欲は強力なアニモを認めることであり、政治とは人間本然の領域というべきもので、偉大さに対する認識それ自体が政治力の源泉であるとする。[13]

実は彼の常用語たとえば前記欲望、気まぐれ、情熱などと野心の用語との関連で、次のことを再考する必要がある。すなわち政略論でローマの諸将たとえば勇将マンリゥス・トルクァトゥス Manlius Torquatus やヴァレリゥス Valerius は忠誠で称賛されるが、マキァヴェリはマンリゥスの意志強固さをとくに考察する要があると主張し、この精神力 fortézza d'animo が結局マンリゥス独特の行動のあかしになるというのである。マンリゥス流の指揮とは第一にこの彼の性格によ

るもので、次に命令の実行を眼前に見せようとする彼の自然の欲求によって証明されるとし、この場合彼の性格、精神、意欲などの諸要素が連動するが、これらと野心との関係は次のとおりとする。すなわち人間はいかに容易に変化堕落するか、たとえ善良で育ちがよくても、ファビゥス Q. Fabius の場合がこのことを証明する。すなわちファビゥスは確かにすぐれた人物であったが、のち小野心に目がくらみ転落したと述べる。またこのことは散文喜劇クリッィア Clizia の登場人物でお人よしのニコマコ Nicomaco と同様な変身ぶりを想い出させるもので、マキァヴェリに従えば人間のこのような傾向からの教訓とは、結局立法者が欲望を極力抑制すべきであるとするのである。[14]

彼の鋭いペンは野心と同様に欲望の政治化を語る。たとえば彼にとって、もっとも好適な欲望とは食や女性や富に対するものではなく、ひたすらに政治的保証への情熱であり、政治的栄光への願望 desiderio である。それは野心、貪欲 avarizia, 欲望 appetito にきわめて近く、貪欲や不信 diffidenza から忘恩 ingratitudine が生ずるとし、忘恩の語をとくに政治的な意味に用いている。現に彼は四つの論文をもっぱら忘恩のテーマで記し、忘恩は国の秩序にきわめて危険であると述べ、しかもこの重荷たるや、もし一歩一歩の政治的歩調が社会的幸福の拡充のために効果的にとられるなら、危険率は最底になるとするのである。[15]

さてここでは彼の諸著作のなかに見られる人間の複雑な諸動因に関する詳細な一覧表の提示は措いて、手短かに次の用語のみに注目しておきたい。すなわち彼によれば、嫉妬 invidia はしばしば野心と道連れになって生じ、不安恐怖 timóre はさらに今一つの強力な感情である憎悪の因になることに注意すべきで、これらが人の心 amino をとらえると、政治的秩序に重大な脅威になると指摘する。[16]

① M. Fleisher, op. cit., pp. 125–9.
② Machiavelli, The chief works and others, tr. A. Gilbert, 1965, 3 vols., 2: p. 762.
③ 前出拙著二〇五頁の野心の章 Capitolo dell' ambizione 参照。
④ M. F. op. cit., p. 149.
⑤ ibid., p. 150.
⑥ ibid., p. 151.
⑦ ibid., p. 151.

⑧ ibid., p. 125 によれば、君主論や政略論にはこの単語に百回以上出会うとある。
⑨ M. G. S., Bd. I, ss. 135–7.
⑩ M. F. op. cit., p. 127–8.
⑪ ibid., p. 128. マキァヴェリの用語の翻訳が難事であることは、政略論の英訳で知られるウァーカーL. J. Walker なども認めている。
⑫ ibid., p. 128–9.
⑬ ibid., p. 130.
⑭ ibid., p. 131.
⑮ ibid., p. 131–2.
⑯ ibid., p. 132–3.

## 三　インジェニョ ingégno, プルーデンツァ prudenza, インガーンノ ingánno, ヴィルトゥ virtù などの語を巡って

本来能力や行動の動機を十分に観察するためには、理性なり知性の役割に注目せねばならないが、マキァヴェリは精神活動のなかの理性の役割の優位を認めず、理性の機能はむしろ野心や欲望に対する助言者であると主張し、もっぱら行動手段に関心をいだき、理性は行動目的を決定するものではないとする。彼は道徳的理性の概念を有せず、彼が認めるものは目的を達成させるための、もっとも効果的な手段を選別する能力であり、この力を示すために彼がしばしば用いる語が右の四用語インジェニョ（狡猾、機知）、プルーデンツァ（抜け目なさ、沈着）、インガーンノ（詐欺、策謀）、ヴィルトゥ（人間の力、勇気など）である。これらの語意は機知、賢明さ、慎重さ、知能、さらにはずるさなどの概念を含むものである。[1]

右の語意の研究を進める前に、彼の今一つの用語 ragióne（道理、動機）との関係を述べて、誤解を避けたいと思う。この語は彼が何かを説明する過程で用いるのであって、cagióne（原因）すなわち英語の cause または motive に相当する。彼の確信では、もし目的を fràude（欺瞞）や fòrza（力量、武力など）で実現させようとしたり、また欺瞞の方が後者よりたよりになるとすれば、人生における詐欺策謀の役割の重要性の方をより評価することになり、そのような世界

では陰謀（Complotto），策略などの威力が欲望の目的物を確保する力になるとし、さらにこの能力は重要な武器であるが、結果が十分満足できるように腐心する必要があると述べる。実は手段が好結果をもたらす世界では、マキァヴェリ流の欺瞞がしばしば一般的な道徳と衝突する。というのは欺瞞者にはもちろん相手があるわけで、彼はこのような欺瞞者にはこと欠かないことを発見して、結局政治力が信頼をひき出す能力であるとし、信頼が単なる知識ではなく、政治的行為にとって、いかに必要かを力説する。[2]

彼によれば、欺かれるということは判断を誤ることと同一であるとし、判断とはそれ自体が浅薄な知識に基づく場合があり、人間は概してものごとを手よりも眼で見分ける。たとえば人は外観を見、実体を知ることはほとんどないというのである。[3] 次に外交官や政治家の発言の信頼度であるが、彼によれば消息通は平素外交や政治的領域で彼らと接触して内情に精通しているから、当然行動者たちの外観すなわち着衣や体格など知悉しているわけであるが、このようなほとんど取るに足らぬと思われがちな外観が、他面政治的世界では重要であることに気づかれないのであって、この眼に見える外観こそ政治の実体構成要素ですらあるとするのである。

もちろん、判断は綿密な分析の上でなければ誤る恐れがあり、欺瞞に悪用されかねないが、ともかくも行動の動機の判別はきわめて困難である。実は欲望が判断を狂わせる根源は彼によれば、判断のすべてが必ずしも不完全でないことを示唆しており、加うるに人間は身近かな問題にはめったに欺かれないとか、また判断の基準を結果に重点を置く結果論を打ち出している。また彼は判断力も一般的概念の応用によって誤導される場合があるとする。すなわち一般的原理は必然的に個別的な実際行動には適合しない予断を示すものであるから、個個の行動に対しても倫理的な要素を含むと考える。また彼は一見善意とか誠実さからは除外された行為によって惑わされ、また野心に刺戟された人の場合を引用して、本来人間は人を信用しがちで欺かれやすく、単に見せかけの動機を尊重しがちであるとする。また彼はこの世の理想と実際に生き残るのに必要な手段との食い違いが、自己と他の双方を欺く主因であるとし、このことを現実の世界のなかで発見する

のである。

右のようなマキァヴェリ流の価値判段の実例が彼の人間不信の論議のなかにあり、しかもそれがたとえば彼の常套語の策謀（inganno）擁護論と関係がある。すなわちもし人間は信頼できぬなら善意は存在せず、ひいては判断を誤るわけで、その根源は単に現実世界に在るというより、より深遠な人間の宿命であるとする。さらにまた彼に従えば、イタリアの弱体化の根元は判断と制度に関係があり、もし祖国が再生し、その文明が仏、西、独などから救済できたらイタリア人のアニモが解放浄化されるに相違なく、しかもまた政治的利害関係のために策謀を巧みに用い、イタリア人を蔑視したアラゴンのフェルナンド Fernando からも学ぶところがあるとする。また体力とか武力 forza では野蛮な敵からも学ぶことを望み、あるいは軍事的訓練にすぐれたドイツやスイスの実例を引用し、とくに自国軍を信頼するスイスを模範とすることを勧告している。

次に彼は詐欺 fràude や前記策謀の実行に絶対必要な、たとえばペルシャやローマの実例をあげ、この二つの単語を取り替えてもよいように同意味に用いている。④ すなわちスパルタの史家クセノフォン Xenophon の記述に追従して、ペルシア王キュロス Kyros なども fràude や inganno を用いたとし、たとえば第一回遠征の時アルメニアに対して、武力よりは数々の詐欺策謀に訴えたことにかんがみて、大事業を企図する君主は詐欺の手段を知らねばならないとし、かつてローマ自身も強大化するのに必要なあらゆる詐欺策謀のステップを見のがさなかったと指摘する。⑤ もちろんローマ自体はカトリック信仰を誇りとしたが、このことはリヴィウスを含めてローマの史家たちが是認しており、彼らの眼には市民の信仰こそはローマ興隆の寄与するところであると映ったが、ローマの偉大さのなかでの欺瞞 fràude の役割を強調するマキァヴェリの判断は、彼なりの意味深さを含むものである。

とくに彼の狡猾とか機知 ingégno の語は、次の実例のように高級の機知を示しており、文脈の関係から策謀 inganno にきわめて近い意味の用語である。たとえば君主論第八章で、彼はオリヴェロット・ダ・フェルモ Oliverotto da Fermo

の生涯を、暴力よりこの機知によって権力を得た一例として記しており、政略論第二巻第一三章でも同問題を取り上げ、その主旨は暴力なり武力 fòrza より欺瞞によって、低い地位から昇進すると述べている。[6] ここで使用される語は結局 fràude や inganno などの同義語であり、君主論でも同様に右の語に加えて、たとえば forza, ingégno, industria（巧知）などを用いた同義語の文脈のなかで、とくに fràude に重点を置くのである。

彼は右の ingégno であれ inganno であれ、政治的頂点に達するには fòrza より重要で、とくに inganno をすぐれた能力として重視する。また政治力保持の困難さを論ずるのに、君主は難局には大いにこの ingégno と virtù（力量、勇気、後述する）ある人物を必要とすると指摘する。さらに君主論終章のイタリア解放勧告のなかで、イタリア人のヴィルトゥの優秀さに注目して、この勇敢さはもちろん老練さや創造的能力の卓越さ、しかもただ欠点は指導者だけと力説する。また彼は ingégno を機知、巧妙さなどを含む意味に用いるが、必ずしも軽蔑的な語意でなく、ある願望を遂げ得るように工夫調節する能力であるとし、またこの語は道徳的含みとは無関係の自由で、一種技術的能力であることに論点を集中する。この能力は必要に応じて若干修辞的には控え目に、政略論の献辞にも用いている。[7] 従って彼は ingégno を人間の重要な能力で、その価値は低く評価できないとし、さらにまた社会に必要なものは熱情や欲望で、この両者は人間が単に運命 fortuna の玩弄物でないとすれば、目的達成のためにものごとを調整し、手ぎわのよさを決めるのに必要なものであると論ずる。

元来彼は単なる理論的意味での理性を認めないが、理性にかかわりのある彼の用語 prudenza（沈着さ、政治的な抜け目なさなど）に関連して、ボーテルロ G. Botero は論著[8]のなかで次のように述べる。マキァヴェリに従えば、支配者の政策は astùzia（機敏さ）よりは prudenza が大切である。というのは支配者の目的を達成するのに好都合の手段を発見し得るのに効能があるからである。astùzia も同じ目的を有するが、次の点で前者と異る。すなわち手段を選ぶ場合、後者は利害関係以外は一切考慮しないが、前者は有益よりはむしろ公正なものに追従すると記している。

マキァヴェリの prudenza は ingégno や ingánno と同様、彼の人間観に根ざしており、この用語は主として正不正の基準を測定するよりはむしろ、目的成就の最良の手段にかかわるものであり、さらにたとえば英語の caution などは必ずしも同義語ではなく、あるいはまた appetite や passion に対する reason の優越でもない。それどころか彼の prudenza は passion からもある程度自由で、かつまたクールな打算であり、この打算は目的を passion や正不正に関する一般の慣習や理想によって、不当に影響されずに目的を達成し得るように計算できるものである。実は prudenza の名解説が彼の書簡のなかにある。それは彼自身の解説というより、サヴォナローラ G. Savonarola の口を借りて、フィレンツェに対する批判を弱めようとする教皇側の圧力についての報告文といってよい。[9] すなわちサヴォナローラはこのような強制下における彼の後退を prudenza と説明して、自らを正当化したが、マキァヴェリのサヴォナローラ観ではそれぞれに目的は異っても、この用語によって人人は過去にも常にゴールを目ざし、現在も同様で、クリスチャンにとってゴールはキリストであり、それゆえもちろん神に奉仕すべきであるが、サヴォナローラは時に応じて手段を変化させるべきであるとする。たとえば積極的な献身と、ひそかに神に奉仕する場合もあると説く。すなわち彼はサヴォナローラが時に方策を変更するすぐれた能力の持主であるとして、政略論にも彼を prudenza の人、情熱の改革者として言及する。[10]

結局彼に従えば、prudenza とは目的実現の最適の行動過程を選ぶ能力で、それは抜群の政治的能力を示す用語であり、しかもまた多くの障害物を排除して、正確な手法を発見することである。ちなみに障害物の第一は分別を失わせる過大な情熱と欲望であり、第二は妥当な動機や方策を識別できないようにする一般的道徳のなかに含まれるとし、第三は人人の行動の手段のなかにセットされており、とくにこの第三点が彼の注目をひくのである。[11]

彼が prudenza と virtù を政治技術完成の最高の要素として、高く評価していることについては、たとえば共和国にふさわしい秩序づくりとかイタリアの救済を達成する上での両用語の含む機能なり役割を、きわめて重要視していることでわかる。政略論第一巻[12]でも右の用語を通じて、公的生活の秩序のための最良の手段について述べ、prudenza と virtù

ある人人を称賛してやまない。とくに prudenza はモーゼ、リクルグス、ソロン、ロムルスのいずれもが、国を秩序づける目的で強力に実行されたとする。

彼によれば、一国の慎重な創設者は単に自身のみでなく、共同の利益のため組織づくりを工夫すべきであり、またいやしくも理性ある人物なら、一国の創建に役立つ prudenza の実践者を非難すべきでないとする。批判は行動の結果で正当化され得るというのが彼の立場であり、結果が有益ならロムルスの場合のように、行動の正当化が妥当で、その理由は咎めらるべきは当初から暴力を用いて、ものごとを台無しにするやからであって、行為を改善するために暴力を用いる人物ではない。一国の創立者は十分な prudenza と virtù を有すべきで、獲得した権威を断じて譲渡すべきでないと力説する。[13] 君主論の最終章でも、救済者たるものは prudenza と virtù ある用意周倒な力ある人物でなければならないと詳述する。彼の言う慎重な人物とは公的生活の調整に何が必要かを十分心得、また大事業のための実力を獲得する手段を熟知しており、そのような人物こそ、まさに貫徹のエネルギーと大胆さを有する偉大な精神力 grandezza d'animo の持主であるとする。

彼はフィレンツェ共和国主席ソデリーニ P. Soderini への手紙[14]のなかで、常套語 prudenza を駆使して曰く、〃人人が用いる鏡とは prudenza という鏡であり、それは手段ではなく、目的を写すものでなければならない〃と。また彼は諸著作のなかで、ソデリーニ流の prudenza には批判的で、それがソデリーニ自身とフィレンツェ没落と関係があるとしている。従ってマキァヴェリの prudenza とは目的を洞察すべきもので、手段でなく目的達成の要素であり、これによって始めて共和国を救済し得るとした。ともあれ彼の prudenza の概念はその書簡、戯曲、論説などに見られるが、その好例がある。すなわちセルヴィウス・トゥリゥス Servius Tullius ?—B. C. 535 がローマ六代目の王となり、戦争計画開始の時、それ以前ローマは四〇年も戦いの経験がなく、訓練された兵士が皆無であったので、彼はサムニゥムやトスカナ人を使わないで、もっぱらローマ人を訓練しようと決意した。このような文字通り慎重な prudenza の人、ローヤ王

の先例が今やフィレンツェ共和国のすばらしい教訓となった。実はトゥリゥスの偉大な力量 virtù が短期間に第一級のローマ軍を創設したが、マキァヴェリは戦術論で同王の力量と慎重さを称賛する。[15] すなわちトゥリゥスこそ偉大な指揮者で、いざという場合、外国の援軍や傭兵でなく自己の武力に依存する必要を予知する洞察力の持主であり、急場を処理する能力を有したとする。

マキァヴェリにとって最高の政治的軍事的知能ある行動とは、結局自国軍の必要を痛感しての行動であり、このような国民軍の基礎を確立する軍事的かつ政治的力量については、政略論に加え、君主論のとくに第二六章に注目すべきであろう。なお彼の思想の根幹であり、原点ともいうべきこの prudenza と virtù に関しては、次に稿を改めてなお若干の実例によって補足を試みてみたい。[16]

① ingégno と inganno とは語原的には無関係らしい。
② 君主論第一八章または M. G. S. Bd. II, ss. 70-3. なお ingégno に関する同様な主旨が政略論にもある。
③ このようなテーマは君主論に限らず、政略論：M. G. S. I, ss. 137-42 でも取り上げられている。
④ M. F. op. cit., p. 136.
⑤ マキァヴェリの立場に関する実例は政略論第二巻第一三章 (M. G. S. Bd. I, ss. 223-5) 参照。ここではすべての論述が最大の幸運を得るには、欺瞞 fràude か武力 forza による点に集中する。
⑥ M. G. S. Bd.II, ss. 34-8 および Bd. I, ss. 223-5.
⑦ ibid., Bd. I, ss. 3-5.
⑧ G. Botero, The Reason of State, tr. P. J. および D. P. Waley, 1956, p. 49.
⑨ M. F. op. cit., p. 140.
⑩ ibid., p. 140.
⑪ ibid., p. 140-1.
⑫ M. G. S. Bd. I, ss. 105-76.
⑬ ibid., Bd. II, ss. 105-9.
⑭ M. F. op. cit., p. 143.
⑮ 浜田幸策訳、戦術論、原書房、一九七〇年、三二頁。
⑯ 前出拙著一〇六―三四頁。

## 四　ブルーデンツァとヴィルトゥ補遺

マキァヴェリによれば、人人が直面する状況に適応して、目的達成の行動についてのもっとも効果的なものは、第一に

prudenza に導かれたコースであるとする。それゆえ彼は、欲望や宗教あるいは道徳上の価値に関する妥当な知識欠落のすべてが、結局 prudenza をゆがめ判断を誤る原因とし、実際行動や経験に関する深い分析が必要であるとする。実はこのような解毒剤の常備が彼の文筆活動の基本であり、諸論者のなかからも次の具体的事実が明らかである。たとえば正しい政治的判断とは、究極的にはプラトンやアリストテレスが指摘するように、含蓄のない単なる空論であってはならないとし、さらに彼一流の政治的価値判断に習熟する必要があり、そのためには体験から得た絶妙な普遍性を含むか否かの問題があるとする。この点例のグィッチャルディーニ F. Guicciardini[1] も経験こそは、たとえ不完全であっても、行動への有効なガイドであると確言する。

実は何事もすべてを無条件に断定はできない。世のなかには例外的な事柄があり、すべてを同じ基準で引用することは不可能である。従って事物の相違点とか特色は、慎重な判断によって始めて示されるわけである。[2] この点彼も、もっぱら経験によって習得した技術を尊重する外交官で政治的慎重さの持主であるが、前記グィッチャルディーニはより以上体験から得たすぐれた技量の人であり、[3] しかも一般的な法則や理論的把握は劣っており、彼の方法はもっぱら具体的立場における個人的経験を通じてであった。彼は徹底的な懐疑主義者で、過去から学ぶことの可能性をむしろ否定し、その立場はあくまでも現実主義であり、とくに政治的領域にかかわるものであった。

元来マキァヴェリの哲学的考察をグィッチャルディーニはむしろ軽視するが、前者は過去および現在の歴史的研究の分野で、哲学的また歴史的考察を有効に適用した。彼の判断力に対する関心は政略論のなかで、ドラマチックに展開する。たとえば同著第一巻序論[4]には次のような慨嘆の叙述がある。すなわち本来古代彫刻は賛美され模倣されるが、古代の政治的行動や制度は称賛はされても、美術品ほどには模倣されないと。結局彼は美術のみならず、政治も制度も過去の歴史をモデルにする必要があると論ずる。たとえば当代の市民法は古代の法学者の判例集に由来するものであり、医術も古代の医者たちの経験によるものであるが、しかも今日共和国の形成保持とか市民軍の編成や戦争指導などの場合、人人は古代

の先例に依存する共和国や君主のことを耳にしたことはないと指摘する。というのは、人人が歴史の真意に対する理解を欠くゆえであり、歴史の機微を玩味せず、適切な認識に乏しいからであるとする。歴史に対する正しい判断の欠乏が、結局人人は古代の諸事実の伝聞には一応の興味を示すが歴史上の事実を模範として実践しようとはしないと主張する。[5] また彼は劇作クリツィア Clizia の前口上で、ドラマのねらいを次のように解説する。すなわち喜劇の役割は人人を満足させると同時に、人人を教育することであると述べる。というのは劇中のすべての出来事は多く一般的な真理を含む実例であり、具体的な教訓となるからで、しかも人人が一戯曲から学び得るものがあるとしても、実際は歴史からの習得の方がより重要であると示唆するのであって、これが彼にたとえば政略論を著わす必要を痛感させた動機でもあったし、また彼が当代人の歴史的判断の欠如を自覚させ、人人の迷妄を解く契機であると考えるに至った経緯でもあった。この問題について彼は同著第一巻序論[6]で、次のように述べる。すなわちフィレンツェの政策を批判した後、批判を中断して、支配者たちが重要事項を処理すべき際に犯した若干の誤りを述べる。たとえば現時の統治者は、かつてそのような問題を解決しなければならなかった人人が、どのように振舞ったかを予知すべきであるのに、実際はそれらについては貧弱な知識しかなかったゆえ、先人の判断を非人間的とか実行不可能として傍観、しかも実際は支配者たちが偉大な行為の可能性を発見したり、国家保持の大原理を会得するのはとくに政治的軍事的分野における歴史の考察であり、その情熱によって外ならぬ公的生活への自己認識をかち得るとする。[7]

実はできごとの実態を理解することは、同時にソクラテス流に自身を知ることと関係するが、しかももしソクラテスが人生の倫理的原則の探究へ人人の関心を向けさせようとしたとしても、マキァヴェリの提示はあくまでも政治的歴史的経験の分析のなかでの認識を意味する。それゆえに実は彼の全著作の中心的原理とは、あらゆる時代は同様であるゆえ、歴史的な方法で過去をモデルに、祖国イタリアは必ず救済され得るとするのであって、このような彼の期待が君主論を始め政略論などに関係があり、とくに君主論第二六章で彼は、過去に可能であったことは現代でも可能であると主張すること

によって、実は祖国を再生させる大事業の際に人人を圧倒しがちな絶望感を駆逐しようと試みるのである。なおまたフィレンツェ史 Istorie Fiorentine でも彼は、この世における virtù と prudenza の総量はいかなる時代でも不変であると述べており、また ànimo は常に偉大さの可能性を示すものであるとし、従って政治的活力の偉大さは過去のイタリアのみに限定されるのではなく、[8] フィレンツェ人は常に祖先とのかかわりのなかで自己を認め、自身の政治的エネルギーと自己能力を発見すると論ずる。かくして彼はとくに virtù と prudenza の復活に寄与するところが大であり、偉大な精神 grandezza d'ànimo の持主であるマキァヴェリの思想の原点は、まさに彼の政治目的達成のために、彼特有の政治的諸用語を駆使して、それらの語が含むインスピレーションを次代に伝える役割を演じつつ、今日に至っている。

① 前出拙著一四六―五六頁。
② F. Guicciardini, Ricordi, tr. N. T. Thompson, 1949, p. 133.
③ ibid., Considerazioni ai Discorsi del Machiavelli.
④ M. G. S. Bd. I, ss. 3-5.
⑤ 前出拙著一九八頁および二〇三頁。
⑥ M. G. S. Bd. I, s. 5.
⑦ ibid., Bd. II, ss. 105-9.
⑧ 前出拙著二三四―四八頁。

## おわりに

以上微力ながら、私なりにスフィンクス・マキァヴェリの諸慣用語の語意を分析しつつ、彼の思想の原点を具体的に模索してみた。今後とも非力を重ねたいと思うが、拙論に対してご教示ご叱責をいただければ幸甚である。なお本年はマキァヴェリの死後はや四五〇余年を経過したが、この小論が今また改めて彼に対する関心へのささやかな一里塚になればと念願している次第である。

（静岡大学名誉教授　　）

## A rumor that *Song Taizu* 宋太祖 was murdered and Taoist temple *Shang-qing-Tai-ping-gong* 上清太平宮

by

Hajime Otagi

There has been a rumor that Song Taizu was murdered, because the process of the succession from Taizu to his younger brother *Taizong* 太宗 was not clear and all proofs that we have on this succession are circumstantial ones. In the policy of Taizong for Taoism we can detect further proof in which this rumor was certified as correct. This proof is as follows.

The *Louguan pai* 楼観派 of Taoism had a base in the western suburb of *Chang'an* 長安 and wielded great power in the Tang period, but it had declined since the end of that period. Song Taizong supported this party unusually. Immediately after his succession an oracle was disseminated, which said that the succession by Taizong had been decided. Taizong built a magnificent Taoist temple for the god of the oracle. Investigating this oracle we can get some evidence that leads us to suspect that it was made by the Louguan pai intentionally. And we can consider that Taizong used it in order to rationalize his own succession. This affair shows a political phrase of the early Song period with *Zhenzong* 真宗's worshipping Taoism and the trend of the bureaucrats from *Jiangnan* 江南 outstandingly.

## The Origins of Machiavelli's Thought
### ——As Revealed by His Choice of Expressions——

by

Eiichi Shibayama

The paper attempts to probe the origin of the complex thought of Niccolò Machiavelli—and specifically his political outlook and historical ideas—through the particular nuances with which he uses such com-

mon words as *ànimo*, *ambiziòne*, *ingégno*, *prudénza*, *inganno*, *virtù*, and *fortuna*, and other synonyms and antonyms and related expressions that can take on a bewildering variety of colorations. Frequent reference is made to the works of prof. Martin Fleisher of Brooklyn College and to papers by Prof. Anthony Parel of the University of Calgary. Machiavelli's thinking is also contrasted with that of his predecessors and contemporaries who influenced him, and the author presents his own reappraisal of the varied course that Machiavelli's ideas have taken down to the present day.